

## 高齢社会 2030 を考える会 第 4 回 開催報告

高齢化がますます進む 2030 年の姿をイメージし、今から地域で何をしなければならないかを参加者と一緒に考える「高齢社会 2030 を考える会」。第 4 回は「シニアも支える地域へ」自治体&市民の新たなチャレンジ」をテーマに、11月15日梅田グランフロントC棟7F都市魅力研究室セミナールームにて開催した。

前回までは、大学の先生方の講演を聴くという形であったが、今回は自治体、社会福祉法人、NPO、市民の実践者の方々にその活動について語っていただく形で行った。

冒頭のエネルギー・文化研究所 田中所長の開会のあいさつの後、まず企画者である遠座研究員から第 4 回企画の趣旨である「医療・介護など社会保障給付費が行財政を逼迫し、このままでは、日本は潰れるかもしれない！」と「介護予防の社会的意義及びシニアが社会の支え手側に回ることの効果」についての説明を行った。

最初の講演は、NPO法人住まいみまもりたい理事長 吉村悦子さまから、「住み慣れた地域で自分らしい暮らしを続けることができるまちづくり」と題し、人口 12 万人の大東市で展開されている生活サポートセンター事業について紹介があった。

この事業は、65 歳以上の主に要支援 1、2 の高齢者宅へ訪問し、掃除、洗濯、買い物などの家事援助や大型ごみ、庭の手入れなどの生活支援を行うもので、税金を使わず、介護保険による制約もない 30 分以内 250 円の有償ボランティア活動として運営されている。

サポーター（担い手）登録者は 693 人（今年 9 月末現在）。今年度の稼働実績は、月 800～900 活動（1 活動 30 分換算）、稼働サポーター数は月 60～70 人。

サポーターは、利用者から利用料をクーポン形式で受領するか、将来自分が生活サポートサービスを利用するために“時間貯金”という形で貯めることもできる。なお、センター運営に関する必要経費は市からの助成金で賄われている。

サポーターは高齢者が多く（最高齢 81 歳）、利用者と同世代のため「それなら自分でやるわ」と利用者の自立にもつながるケースがあるという。また、大学生にとってボランティア活動経験が就職面接時に有利に作用するため、地元大学生の参加者もコンスタントにある。

運営のコツは、①サポーターが 10 分以内に行けるところをお願いする。②空いている時間に自分のできることをやっていただき、相性の悪い人のところへは行かなくてよい。③初



訪問のあとは、どうでしたかと声をかけ、喜んで活動してもらおうよう心掛ける。④利用者の自立を妨げないよう一緒にできることは一緒にしてもらおうよう心掛けていただく。⑤男性宅には男性に行ってもらい、70代男性利用者に多い“男性だから家事をしない”という考え方を払しょくしてもらおう。

サポーターからは、自分が必要とされていることにやりがいを感じるとの感想が寄せられ、利用者からは、都合が悪くなればサポーターさえ了承してくれれば日時の変更もでき、まるで友達ができたと評価されている。

2番目の講演は、宝塚市健康福祉部安心ネットワーク室地域福祉課長 守川武広さまから「エイジフレンドリー宝塚の取組～“お互いさま”があふれるまち・宝塚を目指して～」の紹介があった。

宝塚市は、人口23万人、山手に古くなったニュータウンが広がる典型的な大都市圏の住宅衛星都市で、高齢者のいる世帯の6割は高齢者のみ（一人暮らし含む）。平均世帯人員は2.3人と全国平均の2.5人を下回っており、要介護認定者は高齢者数6.4万人に対し1.3万人と20%を超えている。

エイジフレンドリーシティとは、WHOが世界的な高齢化と都市化に対し提唱している“高齢者にやさしい都市”づくり活動で、ハードや社会システムを高齢化に対応させ、市民参加や雇用などで高齢者が社会に参画し、支え手側にまわることをめざすもの。日本では秋田市について2番目の都市として2017年に宝塚市がグローバルネットワークメンバーに登録した。

宝塚市では、「市民が主役、行政の仕事はその“支援”」と市民協働の縁卓会議を発足させ2018年10月から“居場所づくり部会”“健康・生きがい就労部会”“広報・情報部会”を設け、活動している。

居場所づくり部会では、子育てママ達を中心となり、自治会館等を利用して休日に行ける子育て世代向けのイベント“たからづかファミリーホリ Day”を毎月開催。しめ縄づくり体験、親子ツボ押し教室、むかし遊び工作など世代間交流も意識した活動を行っている。

健康・生きがい就労部会では、介護事業者の協力を得て施設で介護の専門的な仕事以外を仕分けし、1日2時間、週2回、3カ月のトライアル期間を設定するなど高齢者が働きやすい環境を作っている。

広報・情報部会はフェイスブックページを立ち上げ、縁卓会議メンバーが取材した市内のエイジフレンドリー的活動などを情報発信している。

3番目の講演は、前記 宝塚市の健康・生きがい就労トライアルの参加者を受け入れた事業者として、社会福祉法人 聖隷福祉事業団 宝塚せいれいの里ケアサービス課長 赤井祐さまから「何より“自分自身の健康のために”～“支える側”から“支える側”に～」と題して報告があった。

施設内での食事の準備や後片付け、入浴の準備や後片付け、居室のシーツ交換、車イスの整備など介護未経験高齢者でも可能な仕事の切り出しを行い、それらを担っていただくトラ



イアル参加希望者に認知症ケアや車イス体験など介護講座を開催、その後申込者 17 人を、5 月～7 月までの 3 か月間ケアサポーターとして受け入れた。

導入の際、気を付けたことは「私たちを助けてください」「お願いします」という姿勢を明確にし「頼られている」「何とかしなければ」という気持ちをもってもらうこと。また、1 日 2 時間を週 2 回という疲れない、続けられる勤務体制をとり、途中でマンネリ化を防ぐため“シーツ交換研修”を実施し、スキルのステップアップ感ももってもらうこと。

職員からは、「負担が減り、本当に助かる」、「お願いした事をととても綺麗に行っていただき感謝している」「もっとたくさん来ていただければうれしい」。参加者からは、「生活に張りが出て、楽しく仕事をさせていただいている」「緊張するが、とても楽しく、フロアの皆さま方に感謝」「いろんな経験をさせていただき良かった」とのコメントがあった。

課題は、ケアサポーターの就労希望時間とやってもらいたい時間とのマッチング。

今回のトライアル就労は 80%成功で、今後は、①フロアごとでやり方がまちまちの仕事があるため 用意する仕事の標準化とマニュアルづくり、②サポーターから介護職員へと仕事のステップアップの仕組みづくり、③業務分担の明確化による人件費の削減などに取り組んでいくという。

4 番目は、「“健康・生きがい就労トライアル” 実践で見えてきたこと」と題し、今まで求人難で困っていた介護の事業所に 70 人(第 1 回トライアル 17 人、第 2 回トライアル 55 人)を超す人がなぜ集まったのか?について、この活動に一市民として部会に参加し、企画提案・推進を行った遠座研究員から話を行った。

2 月の第 1 回トライアル説明会参加者募集の際、40 ページの市報の 1 ページの 4 分の 1 の記事だったが、「元気なシニアを募集!」「地域があなたの出番を待っています」などと呼びかけたことで、数日で 40 人の定員が埋まったこと、説明会では“動かないから動けなくなる”「生活不活発発病予防」が介護予防の鍵で、「健康だから社会的活動ができる”のではなく“社会的活動が健康長寿を支えている”ということが最近の様々な研究から明らかになっている…などの話を行った。

また、参加者から、「生活の充実、生活のリズムづくりができてよかった」、「10 年のブランクがあり、就業に不安があったのでトライアルがあつてよかった」「自分に合った働き方で初めて働く楽しさを発見した」「職種が広がればうれしい」「素晴らしい計画なので、長く継続することを切に願います」「これからも多くの方が参加できるようにしてほしい」などのコメントが寄せられたとの紹介が行われた。

“健康・生きがい就労トライアル” 活動で見えてきたことは、①もっと有意義に時間を使いたいと思っている高齢者は多い、②無理しない働き方を就労の効用・健康訴求は高齢者の心に響く、③就労参加のハードルを下げることで、超求人難の介護分野でも人が集まる。またそのハードルの下げ方としては、未経験者でもできる仕事の切り出しやお試し期間を設けること、行政が前面に出て市民が安心して参加できる環境を作ることとのまとめがあった。



質疑の時間では、引きこもりが多いと言われている男性高齢者を参加させる手法についての質問があり、講演者から、“その人の得意なことを聞き出してそれを発揮してもらう”、“単に何かをやってもらうのではなく、経験・知識を生かし教える側にまわっていただく”などの回答があった。

また、大東市の生活サポート事業により、それまでかかっていた行政コスト7億円が削減されたことも補足された。



次回（第5回）は、2020年2月21日（金）17：30～19：30、「仮）改めて定年後問題を考える」をテーマに開催を予定している。